



五百旗頭真の 大災害の時代

第26回 [津波との格闘]

宿命と対決した船乗り

三陸海岸は世界的に見ても、もっとも豊かな海の二つである。リアス式海岸の湾の一つ一つが海の幸にあふれている。漁業の中心の道具は船である。たとえば3・11地震の後、津波が一番早く到達した前回に紹介した大船渡湾には、1400隻もの漁船が操業していたという。

沖合に逃れる教訓

海のプロフェッショナルである漁師にとって、津波は想定外の出来事ではない。あれほど大きな地震があった以上、津波が必ず来ると、ほとんどの、とりわけ年配の漁師たちは受け止めていた。そして彼らの間で語り継がれる教訓がいくつかある。

もっとも広く共有され、ある程度まで社会常識化されているのだが、船を沖合に避難させることの教訓である。水深1000以上、できれば2000以上の沖まで出れば安全であるといわれる。深い海では船にとって津波はあつたりとしたつわりのような感じがしない。それが浅い沿岸に進むと、津波は海面から立ち上がった壁となって岸に迫る。

そのことが知られていながら、実際に沖合に逃れた漁船は少ない。8割から9割の船は湾内で転覆したり、陸上へ運ばれ思いがけない所へ打ち上げられたりする。それは大地震から津波到来までの30分から1時間、船の出航準備と外洋到達には短すぎるからである。とりわけ大きな船であるほど、またまた出航準備を完了していたもの以外には間に合わない。後述する大船渡湾にいたロシアの輸送船はエンジンをかけるだけで15分から30分かかるといって、5分間の地震の揺れが終わった10分後に仮に出港したとしても、湾を



津波で港に打ち上げられた漁船(左)。右は無事だった漁船
—福島県相馬市で2011年3月13日、本社ヘリから西本勝撮影

抜けば、水深1000以上の外海に出るのに20分以上かかるであろう。であれば、外海に到達する前に津波の壁に遭遇する危険性が高いのである。

災害時の操船法についても、たとえば「遠くの暴風雨には速やかに逃げ、近くの暴風雨は正面から立ち向かえ」といった教えが津波に対しても有益だといえる。津波が壁のようになって迫ってくる時、船の後部や横っ腹をさらしてはいけない。真正面から津波の壁を登ろうと立ち向かう以外に助かるすべはない。

津波が来たら、海辺にある家が仕方がないが、船は助けなさい、船さえあれば、海から次の家をもたすことができる。そう教えられてきた大船渡の63歳の漁師、志田恵洋さんは、小舟で力キの養殖いかだの作業をしていたが、大事にしていた漁船志和丸に乗り換え、6キロも続く細長い大船渡港を抜けて外海へ出た。20分後に湾口から10キロの沖に到達したら、約60隻の船が沖合に集まってきた。

津波で港に打ち上げられた漁船(左)。右は無事だった漁船
—福島県相馬市で2011年3月13日、本社ヘリから西本勝撮影

津波が来たら、海辺にある家が仕方がないが、船は助けなさい、船さえあれば、海から次の家をもたすことができる。そう教えられてきた大船渡の63歳の漁師、志田恵洋さんは、小舟で力キの養殖いかだの作業をしていたが、大事にしていた漁船志和丸に乗り換え、6キロも続く細長い大船渡港を抜けて外海へ出た。20分後に湾口から10キロの沖に到達したら、約60隻の船が沖合に集まってきた。

波の山を次々登る
海も津波も生きものである。宮城県南三陸町の石浜では、水深500メートルの沖合に出れば大丈夫と言われている。実際あの日、1キロ沖(水深700メートル)まで行く船は揺れなかった。ところが福島県相馬市松川浦漁港から沖に出た約100隻の漁船は、4キロ沖まで出れば良いかと思っていたら、三角にわたって、8キロの大波に襲われた。船乗りたちは真正面から波に立ち向かう決断をした。大津波に向かってエンジン全開で船を走らせて津波を登り、波の頂上で減速して乗り

れきに埋まった湾内で夜を徹して津波と一人格闘した。押し波よりも引き波の方が荒々しかった。湾内の狭くなるような地形では、まるで滝のような激流となり、中間の漁船がそれに引き込まれて沈没した。苦闘の夜が明けた後、沖合に避難していた志田さんの志和丸ががれきにスクリューが取られるのを警戒しながら帰ってきて近づくのを警戒かかった。「夕べ一晩中船にいたんですか」と志田さんは叫んだ。一晩中、小さな船で二人戦った老漁師に驚いた様子であった。「何も食べていないでしょ」と重ねて問い、船を寄せてお菓子と飲み物を渡した。面識もなかった人からの情が75歳の漁師にはうれしかった。家はやられても船があれば、との教えに従って船を守り、翌朝、無事に帰ってきた志田さんは、湾の奥に進むうち、何とわが家が建っているのを見た。涙があふれ出た。その後、志田さんは海難救助互助会の会長となり、湾を見下ろす丘の上で、海を命を落とす漁師たちのための慰霊碑と沈んだ船のための船魂碑を建立した。追悼式では会長としてあいさつした。「われわれ漁師にとって、津波は宿命のものなんだな」としみじみ感じます。ただ、津波は宿命でも、遭難は違う。遭難は乗り切っていくものなんです。

越えるのである。第一波の山越えに成功したと思ったら、第二波が壁のように迫ってきた。覚悟を決めて六つ、七つの大波を次々に乗り越えようと、沖合15時に達していた。海底がこのあたりから浅くなっているのだろうか。津波の総量と志向性が海底地形の交感を受けて、千変万化の怪獣として荒れ狂う津波である(村井俊治「東日本大震災の教訓」)。

いおきへ、まてと、ひょうご、震災記念21世紀研究機構理事 長 熊本県立大学理事長・日本政治外交史

宮城県牡鹿半島の先端に、鮎川漁港と難島・金華山を結ぶ定期便がある。72人乗りの「ボエル」が金華山の港で午後3時の出発を待っていたら、大津波が来た。2人の客が飛び乗った。5分後には潮が異常な高まりを始めた。この日、船長は不在で代行を務めていた鈴木孝機関長(63歳)は、すぐに岸壁から船を離した。そこへ鮎川港にいる遠藤徳也社長(70歳)から無線が入った。「客を乗せて沖に避難してくれ」。岸壁はすでに水没しかけていた。岸壁はすでに水没しかけていた。岸壁はすでに水没しかけていた。